名寄市立大学の窓から～知への誘い～

vol.13

「認知症の理解と対応の基本」

保健福祉学部　看護学科　教授　岩坂　信子

認知症ケアは、介護する方の適切な対応次第で症状が改善したり、対応を誤り興奮が増長され、さらに悪化する場合があります。少しの対応の基本の理解がご本人や介護をされている方の気持ちを楽にする場合がありますので、「認知症の理解と対応の基本」について述べたいと思います。

「認知症」とは、一度獲得した知的機能（記憶、判断、認識など）が徐々に低下し、日常生活の遂行に不具合を生じた状態のことをいいます。物忘れがひどくなり、周囲に迷惑を起こす言動がみられ、援助が必要となります。進行性の脳の病気であるため、外見的にはわかりづらいという特徴を持っています。

「認知症の原因」には『脳そのものの病変による一次的要因である脳萎縮性変化（アルツハイマー型認知症、レビー小体型認知症など）や血管性変化（脳卒中など）、二次的要因である（引越しなどの環境の変化、人間関係、親しい人の死など）』があげられます。現在、アルツハイマー型認知症は全認知症の約50％を占めるといわれ、この病気は、いつの間にか発症し、徐々に記憶力、理解力、判断力が低下し生活に支障をきたすようになります。

「日常的にみられる認知症の症状（言動）は2つに分けることができます。

『道に迷う、物忘れをする、月日が分からない』などの記憶を中心とした中核症状、『物（財布）が盗まれた、怒りだす、妄想、不安』等の様々な精神症状からなる周辺症状があります。これらの症状に対して「叱る、説得する」は逆効果となります。適切な対応で症状は改善しますので、まずは相手の言動を否定しないことが大切なポイントです。

具体例を紹介します。

●財布が盗まれたと騒いだ場面では…

「それは大変、一緒に探しましょう」とありそうな場所に案内し「この辺にないでしょうか」と本人に探させてみてください。「お茶にしましょう」など、財布から意識を遠ざけることも効果的です。

●ご飯を食べていないと言われたら…

「さっき食べましたよ」などと説得せずに、「すぐ準備します、できたら声かけますね」など、本人が納得するような会話を心がけることです。

間違った行動や言動に対して奇異な冷たい態度を取らず、否定せずに、ゆったりと受け入れる姿勢で関わることが接し方の原則といえます。話し方の原則は、一度に多くを話すと混乱や失敗につながりますので『順序よく一つずつ伝える』ことです。

会話の最中に「うーん、顔はわかるが名前が思い出せない」という経験をすることがありますが、『出来事の一部』を忘れることは認知症ではありません。認知症の方は、『体験したこと全体（名前、顔）すべて』を忘れます。本人は忘れているという自覚がありませんので、思い出してもらおうと「説明する、説得する」は骨折り損といえます。会話術を磨き、会話を楽しむ余裕を持って関わることが求められます。

認知症の症状は、周囲の関わりと環境次第で、よくも悪くも変化します。「自分らしく生きたい」と願っています。その方に寄り添ったケアが認知症の方々から求められていると思います。

図書館的話題・刷と版

本のおしまいのページにある奥付をご覧になったことはありますか？書名や発行所のほか、発行日とともに「第〇版〇刷」と記してあります。最初に発行されたのが初版、足りなくなると追加で印刷され、２刷、３刷となります。

刷数が多いほどたくさん買われているということになり、絵本『ぐりとぐら』は発行から50年も経つ今も売れ続け、190刷を数えるロングセラーです。

また、内容に変更のある場合には、２版・改訂版などと記されます。本学の蔵書の多くを占める、医療・看護系や福祉系、栄養系の図書は、法令や制度の変遷知見や技術の進歩などによって内容が変わっていくため、次々と改訂版が出版されます。

大学図書館にはこんな図書があります

～～認知症に関する図書～～

『認知症ぜんぶ理解』
三宅貴夫（メディカ出版）

『男の介護　認知症で困っているあなたに』
中村和仁（新泉社）

『あこがれの老い　精神科医の視点をこめて』
服部祥子（医学書院）

●詳しい利用案内は本学図書館のホームページをご覧ください。（大学ホームページ＞付属機関＞図書館）

●問い合わせ：本館 ☎01654②4199[内線3114]
分館 ☎01654②4199[内線2200]
直通電話